



ヒナ数増加で注目度アップ

大池のカイツブリ



今年もカイツブリの繁殖シーズンを迎えた上尾丸山公園「大池」に、ケレレレレ・・・とつがい鳴き交わす声が響いている。かいぼりの後に生息するようになったカイツブリが、今では大池の風物詩のひとつになっている。

かいぼり後に繁殖を確認

カイツブリは水中に棲む魚やエビを潜水して捕らえる小型の水鳥だ。埼玉県内では池や沼で普通に見られるが、大池では以前は観察されることが少なかった。かつての大池は、外来魚が生息しているカイツブリの食物になる小魚やエビが少なかった。営巣できる抽水植物の茂みが少ない上に、釣り人が池畔に並び、カイツブリが繁殖できる状態ではなかったのだ。

2019年のかいぼりで外来魚を駆除し、ヒメガマなどの生育環境整備を行ったところ、翌2020年にカイツブリが2回繁殖した。上尾丸山公園が1978年に開園して以来、初めての繁殖確認である。

大池では2020年以降も冬期の池底の干し上げを行っており、アオコの発生日数が少なくなるといった水質改善の効果が現れている。在来魚が増加し、抽水植物の生育範囲も広がってきた。こうした効果により、カイツブリの生息数は2021年は4つがい、2022年は5つがいへと増加した。2022年はこのうち4つがいが子育てし、独り立ちしたヒナは9羽を数えた。

自然再生の成果を楽しむ公園に

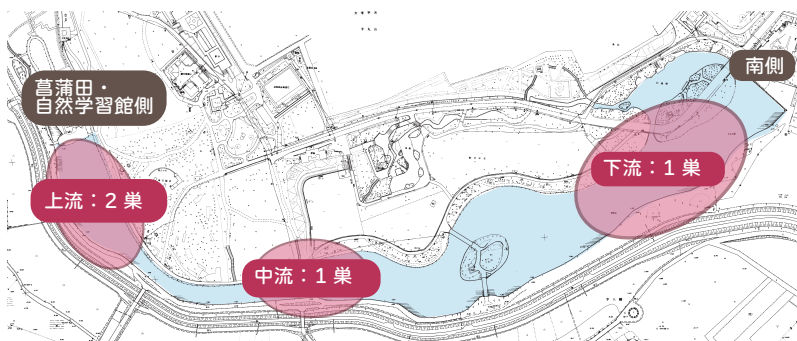
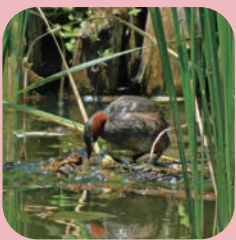
大池で繁殖するようになったカイツブリは、かいぼりを軸とした自然再生の成果の象徴と言える。カイツブリの子育ては「広報あげお」にも掲載され、市民からの認知度も高くなってきた。子育ての様子は来園者にも人気で、撮影に訪れるファンもいる。

カイツブリのほかにも、湿地に生育するミズアオイなどの植物やトンボが見られるようになった。季節ごとに姿を見せる野生の生きものを観察しながら散策するという、これまでになかった公園の楽しみ方が生まれてきた。

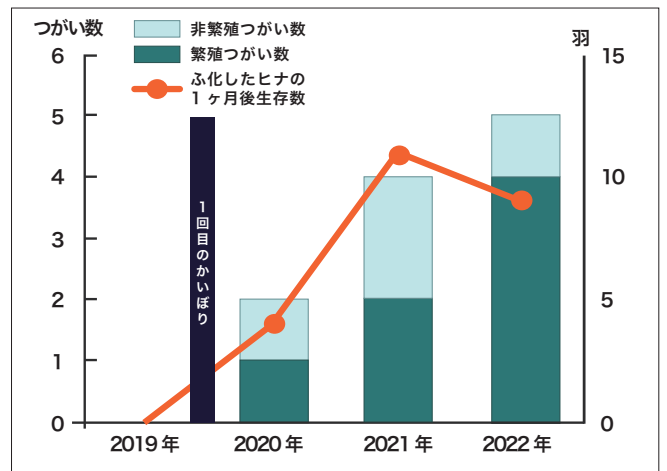
水草の生育範囲が広がれば、今よりも多様な種類の水鳥やトンボが生息するようになるだろう。そんな公園を目標に、協働による取組を進めていく。

お願い

繁殖中は神経質になっています。抱卵中の親鳥は、卵があるのに人間が近づいてもなかなか逃げられません。巣やヒナの近くでは長時間の観察をやめ、離れた場所から見守ってください。



図：2022年に確認されたカイツブリの巣の数



図：カイツブリ繁殖数とつがい数（延べ数）の推移

注目のトピックス

生きものが豊かな湿地に戻す 保全作業イベントを実施しました！

上尾丸山公園の未開園区域には、開園前に田んぼだった場所が湿地となつて残っています。湿地はさまざまな動植物が生息する生物多様性の高い場所ですが、当地では枯草の堆積による陸地化、外来植物や樹木の侵入によって劣化が進んでいます。こうした湿地を再生するために、作業イベント「みんなで水辺守きらめく湿地を再生させよう！編」を12月から3月に計8回開催しました。

イベントではまず、湿地を覆っている枯草を刈り取ります。陸生のつる植物やノイバラが多く、湿地の植物が衰退している様子がわかります。草を取った後は、地表を浅く掘って水たまりをいくつも整備。湿生植物が生育し、ニホンアカガエルが産卵する場所になります。

ノイバラの棘に阻まれながらも、作業範囲を少しずつ広げ、とうとう開園区域側まで見通せるようになりました。

掘り出した土には、かつて生育していた湿生植物や水草の種子が含まれています。この土を、大池の岸に整備した浅場に撒き出し、そちら側でも湿地の再生を試みました。春にどんな植物が芽生えてくるのかを想像するとワクワクします。

作業後にも楽しみが続く湿地再生イベント、来年度も実施予定です。あなたも湿地にハマってみませんか？

湿地にはカモの足跡もいっぱい！



園内に残る広大な湿地



地表を掘って浅い水たまりを造る



掘った土は大池の浅場へ



めざせ！大池再生

みずべもり通信

- 湿地や草地の維持に欠かせない「火入れ」 -

今年度のスキルアップ研修では、桶川市と上尾市にまたがる「江川サクラソウトラスト」を訪問した。ここはNPO法人エンハンスネイチャー荒川・江川が取得した保全地域。絶滅危惧種を含むさまざまな野草が生育する全国的にも貴重な湿地だ。

この環境を保全する重要な作業が、冬に行う「火入れ」である。火入れは湿地や草地を維持する伝統的な方法で、この作業によって枯れヨシの堆積や、低木の繁茂を食い止めることができる。適切に行えば効果的で、面白い作業だ。

同会の小川代表の指導のもと、火入れを体験する。一度に焼く範囲を



風下から火を入れていく

小さめに設定し、外周に防火帯を作る。準備ができたなら、風向きを見ながら着火。刈り倒したヨシがジワジワと燃えていく。こうして一面、枯れ草のない開けた野原になり、野草たちは春を待つのである。

焼いた跡は、春になるとサクラソウやノウルシが咲き乱れるという。そんな場所が、人々の努力によって市内に残されてきたことに感謝せずにいられない。

旬の一枚 ニホンアカガエル (日本赤蛙)

里山にすむカエル。もともと田んぼだった上尾丸山公園にも生息しています。成体は3月頃に浅い水たまりで産卵し、その後春眠。5月頃に再び動き出します。



ニホンアカガエルの卵塊 (上) と成体 (右)